



門曾
號
卷

600

153

汝々日記



帰^シ記

麗澤文庫

在川のき年^ニかを比宮つゝに石き。君北山前^ニ侍りて
より、年幼^{トシガト}よ鶴^{トリ}り鳴^{ナシマツ}吾妻聲^{アヅマツ}おり毛^{スホ}モ絶^{スル}ふ處^ホ。かくも嘗^シ
ぬ仇^{シテ}は傳^シくる事^ハ無^ク。其^ノ君の仰^{ハシム}すより、或^ハ私^の手^中。
うち日^ハ近^シを二、あ^ハうぐ^チる浪花の方^ハ往^キ來^セし。何^{タク}と云
ひて、や^ハ引連^シく、江戸のや^ハ住^メぬよ多^シと云^ハり、嘗^シて今
さうとも、今^の世^{の人}もかほ時^ハ、道行^シめり日記^{シテ}の書^シせ^ま
多くつて、より、かづきハ素^{シテ}すとぞあらうよ筆^{シテ}ドウル美^シカ^ム

半物せんよも思ひて、長き年月をもあへて、^{アトシ}行へば、今茲天保六じ未
の年北春まゝ、^{アリ}廻りに連し、まよぬきより仰事ハシメ、我年もや
六十とソひくかよりぬくとぬきハ、^{アリ}ふ折子をく、^{アリ}ナ
ぬくひ旅歎よ赴く半覺東耶、^{アリ}是を終の旅歎ハシメ、^{アリ}と云
う、^{アリ}せめてハ此處こそ、^{アリ}そのれとの心もく、^{アリ}書てめ置、^{アリ}後との
つま、^{アリ}かくも心ありとせり、^{アリ}御子むまざらが語りほくす
せむとも、^{アリ}ほきが伏事とく、^{アリ}初り、

天保五末年三月四日、元晴渡き、^{アリ}近きうちひは旅立の心がまくし

志々見、^{アリ}ふむ今までもう二語うひー友恒の詠タタ、^{アリ}西面白の坂上モト
^{アリシキタ}、^{アリヤ}カミタ、^{アリ}東北八下谷神田のをとま迄、^{アリ}あ乞ヨシ行ぬ、^{アリ}そヶ中モト、著作堂の翁カミ
^{名解字、シタ吉}、^{アリ}著作堂カミのもの小到イシ、^{アリ}四方山のね落の序モト、^{アリ}主の翁モト、^{アリ}一の懸モトお取出モト、^{アリ}
是ちむ神その伊勢モト、^{アリ}友もく、^{アリ}號モトりあきせー物モト、^{アリ}本居大人のえ
ぐく給モト、^{アリ}上ある哥モト、^{アリ}宣長モトの自う筆モト、^{アリ}本居大人のえ
ありとソ、^{アリ}是後見きハ、真哥モト、^{アリ}賛モト、^{アリ}うきだる

師本居乃山跡公役人モト、^{アリ}朝日モト、^{アリ}ぬや方モト、^{アリ}もくを
此画モト、^{アリ}本居のかくす何モト、^{アリ}者モト、^{アリ}今モト、^{アリ}とよ、^{アリ}とよく五モトを

此終はえゆくありハシヨリテ、せまもろくつゞいたれど、此下を経ゲルる
まわらき、ぬのれのかばりとがむ、其中のものとがきハ、誠ニ得て記
おれりと、翁のよしも得てきほりハ、妻がりといひむかづキまのむ
人のかくと程ツナギよせんとあくみちうーとあり。

因セヨ、すも吉晴く天氣トシ、山中も古々くからず由五郎、おのきり妻

善兵太郎シヤウジンタロウ尚明アキラ次郎アキラ惟明アキラ其次アキラもすめある志物シモツ、あとこのまじ
テリク又リク川リク鉢リク、駒等リクがむ、邊ヒタチ人ヒト、成田某カミタモチそれシテ妻ウニ醫師クスニシ梶原

某モチ官佐クニサ秋山某カミ佐シタ称シテあと、道連ドウレンとあきり、年タメて幼マサニシ古シテにし、胃ウシをとむ

それ後シテ外シテ鎌長刀杖箱カマロウドウヂヤクなどふ物持モノヲシテ者ヒト馬ウマを幸シラフむと云ハシメテ往ハシメテきシテ人ヒト總シテ三十餘人シテ坐シテ立シテ、刺スケツさシテ親シテ疎シテ何シテとシテきシテうシテ多シテ訪シテひシテあシテ門モアかシテいシテ是シテまで石遣シテひシテ男オトコ女メイドの暇シテくシテ跡シテ残シテ者ヒトもあシテそシテ真シテ中シテかシテ別シテきシテ惜シテえシテ海シテ可シテ袖シテをシテもシテあシテ、亦シテ今宵シテの油シテまシテ見シテ送シテもシテ、傷シテ立シテ歩シテもシテ、季シテ、御館シテの門モアとシテ、飯田町西シテの久保シテを經シテ、赤羽根シテをとシテ、高繩シテの邊シテ到シテ、まシテハ例シテもシテ定シテくシテきシテ多シテの心シテたシテすシテあシテ、閑シテ有シテ松シテや、萬シテの木シテの花シテ咲シテて比シテ延シテ、梅シテ樹シテも盛シテり、彼岸櫻シテの木シテもとうひ初シテ、椿山吹シテの色シテ咲シテ、

捕ひしら見ら日うちへしてすこしこ一首つづり也。

客行恰遇暮春天况復芳菲開路邊
不管途中風趣好只懷故舊別離憐

又哥一首

鶴り鳴君妻の春小旅立く見とぬふ里の花や草も
度もも了後品川の駅のがたばよ到りシテからむ紀伊の國旅
大守の江戸小守候シテ迎スル奉スル今ハ所の下司シタツガサを多く立
ほどひく道シテ水シテあシテ罵シテおれシテすシテ小侍シテの

旅人シテ立シテあシテ止シテて道シテ去シテゆシテ已シテは後シテの方シテを換
切通シテて辛シテくして三軒シテとシテ酒樓シテ小登シテよシテはにまうシテお
誠シテきシテ人のシテえれむシテせんシテとシテ誰シテ多シテく來シテ侍居シテよシテれ
やシテ別シテきのシテ亞シテをシテむシテ小山田人シテ俗シテ將シテ書シテ名シテ與清シテ

木村シテ頃シテ此シテ高シテねシテかシテ馬シテのシテえシテむ

平 小山田與清

今シテより八シテ千シテ代シテナシテまシテ君シテれシテむ名シテ誉シテちシテねの风シテ乃シテおシテつ

木村シテ通シテ明

君かくして誰かきかせも今よりれせと物はひる風のあとつき

又田中氏名勝宥
俗称寛次ハ此見送りふにまどもく五首の歌あくは

木村の君のこととの事なりとてまちりふを

まよまひくやまひなうり道立し絶えとまふもと

松くまあはきう

勝宥

松くら松まひうつ見とくやうと聞ふことそりてまちりふを
今いぐりあうとそまにふきものあふあんとまにまわる
あきくくきをれをねり住到へあまえあもとを

通明
返一

何はもう大野ぢ山ぢ喰花ふことをれ花もさむくひすま
君えはくよ春のあーきと故のむらゆのまくすまくまほ
住到へとをあくとをつらふきの割とがきくあら
たのの桃と梅乃多香みへだらく正それ花も咲く
あき居くまの花とねのむち秋の桜まもせすのも

かくて互ひよんの私語り合ひ、盡之削きよぢまくをへりとせも
す。も多様家を互ひゆく、且參ひぬか奈川の延大寺尼院の跡又
やどうぬ。宵さうひ宿の内俄よさみき立て、山大あくと喚ひ置く。所の
を近も乞ひて御^ハ肝^ハをけぐ。何^ハアリと聞ひ聞ふ。十町ぞうり
東の方ねらる。ま此^ハ凡の上ふ當きハ、ソミテウ心^ハ在はぬ。
まシテ^ハちの聲もたれく流りぬれバ、皆歎ひ食く。袖も^ハ小者也。
同八日晴天朝^ハ加奈門のやうりと歩く、戸塚の坂のまより道を左
取、松木^ハ籠倉乃方からく。五山の^ハ建長禪寺^ハ詔^ハ山門の匾

額^ハ宿^ハ大^ト也。建長興國禪寺^ト書^ハり。宋の沙門^ト子^{シド}墨^ハの筆^トと
し、志門北匾額^ハ、巨福山^ト書^ハり。巨の字の中、此^ト一毫^ト加へどり。
併^ハ是^ハ百費^ハ点^ハくめでた^ハもすこと。夫^ハ圓覺禪寺小
詔^ハ是^ハも五山の一つなり。山門の匾額^ハ。

花園帝の宸筆^ハ、もととぞく右極^トと稱^ハり。山門の巨^ト壇^ガ不^ト
壇^ハ終^ハり。宋の沙門^ト子^{シド}墨^ハの筆^トと云。此石階^ト下^ト。東の
道^ハかく鶴^ハ岡の八幡宮北御社^トねむ。北御社^ハも^ハりと
夫^ハ燒^セしに公^トより命^ハひく。官居^トも^ハふ遠^ハき^ト一^ハ故^ト。

むうへみ猪りく、ソリ、キレ、神慮もすそ守にひなをも、
大馬カマと詔て、甲籠カマツチもあさうハ陽の立代タケねじあしま

廻席カマツチハ多くの神佛の御影、種ヒメの御宝物、アリ、不名ある人の太刀
双馬ツルギ物の具ツヅクつる松マツが、詔カミでも、余ムカシおまき、御主居ミヤシタをまかり
きて、福殿村渕カマツチ、清淨泉寺の金洞の大佛、新長谷の觀音堂カマツチと
お、まよひ江の島の辨財天カマツチ、ハをまよひとまよひとせり、船カマツチ
入カマツチ成カマツチの刻カマツチ、小舟カマツチの詔和多處カマツチ、七席カマツチ在處カマツチの許カマツチやと、
同九日晴天カマツチ、朝カマツチ、夜カマツチの詔とゆふ、道カマツチの下庸カマツチ公英カマツチ、土筆カマツチあり、多く生

ゆるをめつゝと、作カマツチための子下カマツチをんぶの、日カマツチをされ、
互カマツチあらそひ摘ツミめも仰カマツチか、

長冥カマツチは心カマツチもあ乃カマツチたの、よ草カマツチと伏カマツチと、摘ツミそんや

酒カマツチ向川カマツチ、國のすゑ田原カマツチの君カマツチより、一所の下司竹升集カマツチと
移カマツチひ後カマツチ、度カマツチきよ、御對カマツチトして、愚人カマツチをえり、著カマツチがふ
比カマツチ田原カマツチの延カマツチ、清水堂古事カマツチの跡カマツチが、
四十日晴天カマツチ、ハ名カマツチよさき翁根カマツチの山カマツチを數カマツチねき、バ根カマツチを朝カマツチと
どうと立カマツチり、ちれ小界カマツチ、依カマツチふくすうり、流カマツチを眺カマツチを景カマツチ、船カマツチと

鳥をやふとて、てう折る道となむ。秋山の北翁根の新家と
て、茶店ふつてみ、大名の御の本陣たる石打太守太清の出迎へ、開乃
通り文慶主、立ツカヤ、上司一室ハナ、社やく女の内政事ミコトシタ、やそきを通す。

金銀なる室の戸をもりて、モリニテ、そぞれにあくと附せがまし

石打の御ふきより、ヒルゲ、金鉢ヒルケをあくめねとす、さうの裏の庭を下り、湖の
京急キョウキのそとへ、あら茶店の下をんあひ、よつて起りて、俄小舟クモロをえまひ、
よがりには、あら茶店の下をんあひ、よつて起りて、俄小舟クモロをえまひ、
やり金毛色キムコロを仰ありとく、あくの老先シロシタ、くもろいぬまくまく

ゆ流ユリんとて、量り金ひく、どもとすとく所、アリ川流れアリすもひく、梶原某カシワ某カシワ乃
通すとえきて、其所カシワ有金カシワ老カシワの、何をスレ敬ひハシメひれハシメ、社チ袂モトを
ぐり重イキく、カシマく小乞カシマ一ヒサ、梶原カシワをカシマがくと、珍シラタニ茶カシマ、
頃ヒミ小憩イキ、心地カシマかカシマめカシマ、所カシマの老カシマ飲カシマびく、梶原カシワをカシマをカシマねカシマ、
済カシマる葉カシマ佛カシマ、佛カシマおすとく、愛カシマすとむすりかカシマかし、カシマれ三画カシマ、
因カシマ青カシマ晴天カシマ朝カシマくさりと出カシマ、カシマすとす御カシマ、カシマ相カシマあとカシマ所カシマとく、富士カシマの
高根カシマをカシマふと、峯カシマの晴カシマつ墨カシマりカシマ、山カシマの姿カシマ能カシマとも、君カシマおれカシマ、峰カシマ

雪の降つて白物ながら、雪原を隠すやうに山あらむせきの如あり。名
ある人もの詩つくりあるもの多く教限りかく、已等ヨリタキ中等ミツ小杜コトツ
詠コトバりし生もねハ無れと、徒タダふやまゆんも本意かとと思ひく。

詩人の言葉つくりて答せを以てすと、ふ富士の事コトを

漫籠

新しく公牛コウウりとのぞみ、柏原カヤハラもあそびの蒲焼カバヤギとお所の志産とく
飯と賣るが妙と云うじめきど、江戸の和ハナフたゞとすをくわづ。
上方のあやしと書りて高倉タカニきりタカニあくアカニハ、長野ナガニ松原マツハラ
が路ル多タチと、性シズとシズ小津コツ井イ津井ツヰの段温飽センヌイを尋シテの詩シか。

同十二日、墨天モクテン少チ一雨停る、胡コトコトと竈カマと立あり、臺比タヒ佐サ助スジの菴店アソブ、菴庵アソブ、
立翁タケシキの跡ハシマ、此ハシマの巣スズメ、皆ハシマの巣スズメ、皆ハシマの巣スズメひよひよヒヨヒヨ、又
安政アンドウ月チと云餅ウエモチを賣アマき、庭マチから木キ生スル、又アタマ月チかさせた
又アタマ木キ生スル花ハナの盆ボウと詠シんで、もうしの里アシカニの庭マチの木キ
安政アンドウ川カワ、あらかアラカが、駿河スリカ大城オオサカ市シの日本多ハシマタ何ハシマ大オオ金カネ、徒タクの巣スズメを
望モチツキ月チ何ハシマ東ウキ何ハシマ、を川カワの徒タク人ヒトあどアド、云クマツ上アマツ可カの命マツルと、石シケりきシケと
祐ヒヨウひよひよヒヨヒヨ川カワ越カマツの巣スズメをよこヨコて、あよとアヨトあよとアヨト、石シケりきシケをヲが
やう者ヒト、かふ公カブコの言ヒトを仰アマツてあはアハ、我ワ君カミの心ハシマシひよヒヨ、かふ

辱しも初のくとくとせられ、すまうるる君翁の歌とよきも、小げ所をちる
午のひの十二月二日ふたの巣あつて、一段ずつもはとうかく焼くとばす。ハ
やうく仮のあだくを加へて、縛と密と身ねつに、里人等の脊屈と居らすぬを
見きハ、氣きとふをうづむく。音きえがねく青に、次も鳥の聲ふべり也。
四十三日、すすき景天かく、カ一雨降ら、大ぐく宿と立きり、身を海道と叫え
たる大井川が東つに、是まで日和様さらゆゑを、さくもの太河を、かへてとに
かくて、川越の便も、人馬小走、六千石相とあくち定めり。ひそむく
比夜の中山を越すに、ひ跡ひへて、暑ち根しづき、腰ぢ扇ふで打

聞き御のあくちあふきつ、すく見たば、扇ひまきひ旗立の二日音だかを
前ふ結城翁姓春木名南湖の、ふりりきり馬のたぶもけまくと、またかう山の
飛ゑづりて、其うへ小歌をあむきりつけたり。

木村大夫の故里へ帰り、まきをかくと

詠人志哉なききよたか

七十斎南湖

斯うせし扇がりなきへととんぼううみく、返一のふと、
徒きて君らん乃花あくと、とおきゆく、夜の中山

始よりすをさへ元弘の亂の頃、僧墓朝臣の墓川のお説り又、夜泣公
の雄キニとよめう年、或、館の候とよもうかうふ家もと、年ぬくま、今更
そもハ用要なし、貞の私フジロ舟の駆た由ハ老の旅ハヤシタガ也、
四十日晴天、凡て吹き、朝と夕と出、すも猛烈ハヤシタガ天アマツ熱
の月ハヤシタガ船の海ハシマをあへとせし私ハヤシタガ、漸ハヤシタガ下ハヤシタガ
村の長橋、河原ハヤシタガ小舟ハヤシタガをくの私ハヤシタガひすうす例ハヤシタガの事ハヤシタガ、中の割り、私
篠原ハヤシタガをとて、所ハヤシタガは風ハヤシタガがまハヤシタガふつて吹く、夕ハヤシタガは無ハヤシタガと八重を渡
べき私ハヤシタガふる、やうに困ハヤシタガあら、春ハヤシタガ假ハヤシタガ小舟ハヤシタガぬ、ふ風烈ハヤシタガきよ上ハヤシタガ手ハヤシタガ、
土ハヤシタガ

空あれ、荒舟の実代越ハヤシタガむとの寢末ハヤシタガと所の人のふと夕ハヤシタガ、その次
ある玉清院萬ハヤシタガの許ハヤシタガやうり也。

同十五日晴天、ほとめくとて、有りをあつ、今切の海ハヤシタガをとて、冥ハヤシタガやく女の
御改と請り半笠根ハヤシタガ小舟ハヤシタガ、全ハヤシタガは吉田の歎ハヤシタガとよ田舎ハヤシタガひづる男女の
たえび往來ハヤシタガして、多ハヤシタガいぬハヤシタガりて何ハヤシタガすあ能ハヤシタガと因ハヤシタガす歎ハヤシタガの合ハヤシタガたる何ハヤシタガ
寺のわと金小舟ハヤシタガ、禮はる金毘羅神ハヤシタガ奉る燃ハヤシタガ笠ハヤシタガとも、金縛ハヤシタガともなま
よとあると、達ハヤシタガたとおも島ハヤシタガなりとて、新ハヤシタガふを詠ハヤシタガつるハ、歎ハヤシタガの歎ハヤシタガよ
ゆるゆく、伊賀秋葉の大御神ハヤシタガをとじめ、諸寺諸社ハヤシタガまもるハ珍ハヤシタガし

かくも是ははて大きき松の見つどなりまき上
ひき森松の駅なる豊田郡立木の松ふやうりぬ

國二ノ晴天、すもすくやうと立木、宇村と木を立木、法光寺と立木寺、
本尊正觀世音の國廟あつとくを近人のつとひ詔すむち、等もじ
神祖のましく御心、御子サあき時の門をゆひ双紙、又ハ刀物の
具の表、ね多く氣の立せむ、然れどみだりふた、余ハねまし、秘め事と
あり、は所哉とく、吾崎村矢野の長橋なり越えて、草店ふる木ばきの
草店ハ、立木の国樂と云ふ、名産あつとひざく家多、あと立ちバ、津陽穀

媛の古跡あま、此津陽穀媛の年ハ、中古の化り物語ふと、冥木亭の有り
しホ、此木亭の時より、あく年送り設け、傳りとせふ弘めら、行と
性移、有松の里ふ、此里ハ、経り深の竹とひざく家多、住木の全
見木亭、此木亭、又ハ童下壁とぞ、暮ひあく、給めされ、立木亭
あどづすあづ季、季の比鳴海の歌を、錢を新木亭の松ふやう
國十七日晴天、すもすく、有松と、熱田小町、船と、度ひく七里の度を
哉、中の刻うち北桑名の歌を船若く、まことに省もとせしに、又ハ因幡伯耆
兩國の大守のまふ浦り、浦ふとく、此の因幡えき浦り家の明もつを

無事ハ詮々あくまは所を出り、夜道をたどりて家の別荘アリか四日市のみゆるはテ心差き居の家へやふ。

四十八日、墨天朝モクテンノミタカ小僧と出、四日市よりサヘシマツあるふ、追分スル所あり、まゝへきりと伊賀の大神イハノミコトに詣アリすよの道、西岐シナガ小介シマツきる所アリ也、前アリハ名脇ナミツキし野ノ、至アリは龜山カメヤマの傾クレバなる、西宮田シマツミタと所アリをもに、此村少しあくらうの村多アリ、そひく小穀コモリお縮纈ミツギのたぐひ奉アリるに、踊アリりうきひもアリてアリ、おまと婦オマトコト初ナニヨ見アリとアリは是アリと見アリ、人多く立つてアリてアリ猿アマひ

踊アリるをアリ、つらみ卑アリびたアリをアリ、旅路アリハめづアリくて鳥アリ、又アリべりて、
関アリのまアリ小車アリと、駄アリの入アリの川アリ小渡アリ、大アリ土橋アリ、まアリう遙アリ
南アリの方アリ見アリ、ハ小山アリの釐アリに、さしてアリやうな山神アリの祠アリます、此山神アリ
下馬アリとアリ走アリてアリてアリ、此土橋アリを騎馬アリ通アリるの橋アリある
まアリ、屢アリなきアリ、通アリらむ人アリ、終アリりままでアリすアリとアリ所アリの人のお詫アリ
きアリ、廿日アリハ坂下アリの歌アリをアリ、大竹アリをアリ篠アリの篠アリある、
捨アリ山アリとアリ、此山アリの姿雀アリ鬼アリ崎アリあり、名画アリの人アリを写アリ、晴アリりし

立
故筆捨山とぞよし、猪の鼻とぞ所ふつらふ、俄々風烈とぞ能
あしの吹雪して、肌をくゆる心地せし矣

時あるぬやうの吹雪を風沙がふ山猿とあやまつぬゑ

山野我とすあしの吹雪到きハまくハ矢晴とあそひかねり、此故ハ暖と云
茶と肴妻名庵をちかくシテ、ひそく家多く、水口の故の茶店を登
餉とすに鰯の羹、所の名庵をもよへ、坐せりぞ、风味あしこそ
著とつけられ、またもあく暮かは比石粉の故ゆ小鴨食事の跡である
因太日晴天、午も朝とくさりと出、道のりを小日向村あり、若と交へる

飯と豆腐の田樂とふあら菴とくひもぐ家多くたり、又梅の木村とぞみ
列すか、あくよハせきふとぞ薬と伊吹山の艾モモと賣る家多く、あらとぞりバ
草津の駄小列ふに、所の生土の御社、立木明神祭神の内境内小祠持り
え、人衆く詰ひこり、北御社と云、六櫛と奇社と嘗て建るは、所へ
居る櫛の下へ今土と運び候寄附もと小畠女房小篠末章、新築小
思ひふ主と聲て、候と運び奉、新うくせのやうと取を之
ひ之所の御社も、御うき玉城、御の町御所ふ、もうひ賣うる家あり、
姥の角と名を申す、又所の名庵小井の根の馬籠あり、臺を立

石場と、茶店ふゝまゝは家の高櫓、湖水のぞき、宿屋もほゞ、襖
をり附けある繪、都が名づく画かぐらのあづかるちり、障子とめられ、
四方のあづかる暗やうれり、下僧ツヅネおおそくら包物のまゝ、望遠鏡トホノカズもうそぞれ、
名をき八景ハチケイある所をひきの山マツ限リあく日のあづかる小集コシラフうつされ、彼が國
むち僊人ヒトドリのせと縁わたり、術ハサウエ新くやとみづ、をゑひよ、えぞーかびりてきと
す、まゝ日高を有、大津の歌者ソガ卒ツル御西ヨウニシの詠ウタふる者ヒト、まゝり、松遊マツユり、
幸崎カラサキの松見マツミ、太郎次郎タロウジ郎の子ヒト、免僧モクジン、等ドモ誰タレ彼ヒ坐スル行ハシり、
明日京へ参ムカシ用メシの半ハーフさえあれハ、跡シテふのまゝく、種シナギをすとト手ハンドをり、

同上。晴天、乃ハ或國の大守アリの、家を畠のまゝい所シマツ小こほくと、先ハシゴひの人等
朝アサヒくよを立タマシバつと、をそそり、より早く省シテと立タマシバり、三升サンボウ寺ジふ詣マツリ、
門堂の下より下の方シテ、城見シマツをもと、高觀音タカケンオンをとすスルもと、取ハシマツく、湖の上處
それで、志賀、幸崎カラサキもと、なまぬまき、一ツねあと目メの下に見ミゆ、あとに山ヤマ所シ
の援アシ處シテりやく、眺シテつもんじまき、寺ジを坐スル、小間コヤ越エスて所シ、
通アリく、跳揚アリて所シと、都三條ミツジを、木底町キタマチの、轟クラクさうり、
若魚カワニ、其家アリ、前アリ、高瀬タカセの河カワ下シテ、細ススき小路シナリあり、往來アリ、稀ハラハラて、
静シタマリ、所シ、利アリ、後アリ、三條ミツジの、川邊カワマツ、大橋オオハシの、すす見ミゆき、東山ヒマラヤの

名所一ツも見え、眺望^{トガ}たる所ぞ、いと能き事なり。去る七月小江
戸と立^タくより、山々登るて谷ふおり、川と歩涉^{ハシカ}す。海と波^{ハシマ}すとえく、
百餘里のをちき路と越東^{ハタケヒタチ}と知はむよハシマリ。多しの竹^{シテ}も枯^リも
道の脇^{ツツ}あくまくかきくまくみをみゆ、そぞれに^{ハシマリ}若^{ハシマリ}にかじくを歎^{ハシマリ}び。
何が如^{ハシマリ}事^{ハシマリ}か^{ハシマリ}、此^{ハシマリ}へ^{ハシマリ}や妻の^{ハシマリ}お牧^{ハシマリ}、^{ハシマリ}お誠^{ハシマリ}さん^{ハシマリ}諒^{ハシマリ}訪^{ハシマリ}某^{ハシマリ}我
君^{ハシマリ}の都^{ハシマリ}の年^{ハシマリ}、仕^{ハシマリ}北島^{ハシマリ}某^{ハシマリ}、^{ハシマリ}あど^{ハシマリ}かほくす^{ハシマリ}ほひ居^{ハシマリ}、何^{ハシマリ}き乃守^{ハシマリ}
孩^{ハシマリ}り舍^{ハシマリ}り、^{ハシマリ}人^{ハシマリ}と^{ハシマリ}体^{ハシマリ}を^{ハシマリ}な^{ハシマリ}、皆^{ハシマリ}帰^{ハシマリ}り、^{ハシマリ}氣^{ハシマリ}ハ^{ハシマリ}霄^{ハシマリ}を^{ハシマリ}そ^{ハシマリ}候^{ハシマリ}。我
同^{ハシマリ}二日^{ハシマリ}晴天^{ハシマリ}、^{ハシマリ}我妻^{ハシマリ}ハ^{ハシマリ}己^{ハシマリ}ヶ里^{ハシマリ}なる牧^{ハシマリ}某^{ハシマリ}、^{ハシマリ}治^{ハシマリ}郡^{ハシマリ}カ^{ハシマリ}神^{ハシマリ}の許^{ハシマリ}用^{ハシマリ}の年^{ハシマリ}ありて^{ハシマリ}。

登^{ハシマリ}山^{ハシマリ}比^{ハシマリ}石^{ハシマリ}石^{ハシマリ}、左^{ハシマリ}右^{ハシマリ}次^{ハシマリ}而^{ハシマリ}の^{ハシマリ}と連^{ハシマリ}く、宣^{ハシマリ}と^{ハシマリ}、祇園^{ハシマリ}の附社^{ハシマリ}を詣^{ハシマリ}、
八坂^{ハシマリ}を通^{ハシマリ}く、清水^{ハシマリ}の觀^{ハシマリ}せ音^{ハシマリ}ふ諸^{ハシマリ}す。今年^{ハシマリ}ハ^{ハシマリ}此^{ハシマリ}附佛^{ハシマリ}と^{ハシマリ}戸^{ハシマリ}まで^{ハシマリ}將^{ハシマリ}りて、
諸^{ハシマリ}ふね^{ハシマリ}も^{ハシマリ}も^{ハシマリ}も^{ハシマリ}、高^{ハシマリ}れ^{ハシマリ}小^{ハシマリ}書^{ハシマリ}、建^{ハシマリ}首^{ハシマリ}、何^{ハシマリ}も^{ハシマリ}業^{ハシマリ}不^{ハシマリ}書^{ハシマリ}く。高^{ハシマリ}の^{ハシマリ}澗^{ハシマリ}橋^{ハシマリ}あ^{ハシマリ}こ^{ハシマリ}あ^{ハシマリ}りて、^{ハシマリ}か^{ハシマリ}ら^{ハシマリ}木^{ハシマリ}通^{ハシマリ}と^{ハシマリ}を^{ハシマリ}通^{ハシマリ}ふ。あ^{ハシマリ}小^{ハシマリ}鳥^{ハシマリ}を^{ハシマリ}高^{ハシマリ}い家^{ハシマリ}、^{ハシマリ}か^{ハシマリ}る
様^{ハシマリ}の^{ハシマリ}子^{ハシマリ}と^{ハシマリ}五^{ハシマリ}六^{ハシマリ}七^{ハシマリ}丈^{ハシマリ}あり、左^{ハシマリ}右^{ハシマリ}次^{ハシマリ}而^{ハシマリ}を^{ハシマリ}悦^{ハシマリ}び、^{ハシマリ}そ^{ハシマリ}價^{ハシマリ}ひ伏^{ハシマリ}間^{ハシマリ}、^{ハシマリ}お^{ハシマリ}告^{ハシマリ}候^{ハシマリ}ひ^{ハシマリ}一^{ハシマリ}か^{ハシマリ}ば^{ハシマリ}是^{ハシマリ}と^{ハシマリ}保^{ハシマリ}有^{ハシマリ}む^{ハシマリ}と^{ハシマリ}何^{ハシマリ}ぞ^{ハシマリ}答^{ハシマリ}え^{ハシマリ}む^{ハシマリ}と^{ハシマリ}、一^{ハシマリ}つ^{ハシマリ}そ^{ハシマリ}う^{ハシマリ}と^{ハシマリ}そ^{ハシマリ}う^{ハシマリ}と^{ハシマリ}、^{ハシマリ}者^{ハシマリ}の^{ハシマリ}心^{ハシマリ}を^{ハシマリ}か^{ハシマリ}か^{ハシマリ}て、^{ハシマリ}ふ考^{ハシマリ}う^{ハシマリ}、^{ハシマリ}お^{ハシマリ}考^{ハシマリ}う^{ハシマリ}、^{ハシマリ}け^{ハシマリ}候^{ハシマリ}何^{ハシマリ}ぞ^{ハシマリ}問^{ハシマリ}、^{ハシマリ}其^{ハシマリ}は^{ハシマリ}候^{ハシマリ}者^{ハシマリ}か^{ハシマリ}う^{ハシマリ}と^{ハシマリ}、^{ハシマリ}者^{ハシマリ}の^{ハシマリ}好^{ハシマリ}み^{ハシマリ}は^{ハシマリ}最も^{ハシマリ}と^{ハシマリ}かのま^{ハシマリ}一^{ハシマリ}か^{ハシマリ}も^{ハシマリ}か^{ハシマリ}ふ^{ハシマリ}思^{ハシマリ}う^{ハシマリ}、^{ハシマリ}候^{ハシマリ}ハ^{ハシマリ}都^{ハシマリ}會^{ハシマリ}の^{ハシマリ}旅^{ハシマリ}者^{ハシマリ}、^{ハシマリ}者^{ハシマリ}ハ

多くいふ憎むべし。其處まで又も宦びまことにかきく、因賜藥師の附堂小
説あり。其は戯場ありて、俳優ハ市川新作、中山樂之助、關川草三郎、中村
仲助など、年若き者共々、かゝがる盛衰記といふ在言まとく觀る
者る人衆く賑ひて、此所を過ぐ、日暮く宿ゆゆり。

同日晴天、乃ちとく起て、妻の親許より牧家へ移り、主ハ君の仰すより
て、はやからて留守候り。其妻ゆる人、其子を行某、備前守、次郎某、越前守、主の
弟ゆる北小路某、其子を少輔、主の娘も出て、尊とまめらふ。とてて
又まよひて、己の妻子をえしめ、牧の太郎次郎、小路某、牧某、次郎某、越前守、主の
孫ゆる己の妻子をえしめ、牧の太郎次郎、小路某、牧某、次郎某、越前守、主の

西大路前守相君の内人あら赤松某、民部あと打連て、北野天満宮に詣て、
其をもて主社までも供ねて御室お到りに、般迦佛の岡麻ぢりとて、
人衆くつひこう、嵯峨の様をもじる天龍寺少佐は、寺の坊の由、
慈濟院とて、又詔はせし寺ハ我君の遠づ御祖、

英公の靈牌を納め候て、一所かれ、由よ入る小院をハ東よりお識り人
や、わたくし出迎へて、書院すばり、茶事あるともとあまき、正まへ方の
手總引お詔下る、本み三幅の寫もあり、中は達磨、密下小坐する像を、唐の
顔輝の画、左は夢窓国師の筆を、右は所住而生する二句を書

に、つまもあむにあゆみ、日暮もんをせす。夫より嵐山の林^リへ行^{マス}る
の樹の桜の今を盛りと笑かくと眺^{マサニ}所の名と嵐山とあつて、

並もゆき桜のふよらやく、花ふらはちもとひゆだらも

山の名乃嵐山とあひて吹け花の生^リの家中^いあきひ野

大堰川を舟^ヨすまく、千鳥^{サチ}が洲^{シマ}と所^シは舟^ヨすめあひこまうえほも、
あむきの氣をうながみく、桜の盛り高^{タカ}中^ミからば、渡月橋^{ワタツキ}にて、川^シ
舟^ヨすとさく近き、今をぬ所^シもく、あつとい官家の人のそひとも、商人
職人の車^サびな、或^ハ妓^{ヤシ}舞^{マツ}女^{コノナ}と伴ひも、てえ五箇^ごをと携^{マサニ}るあま、碎

ひ叶^ハまつゆもあり、うかきて舞ひ踊^モあらぐ、さくよ、^{シテ}は、廣^カき川^{シマ}を、淮^カを
亨^カの地^{シテ}もあし、無れどすが都人の心長^{タガ}やう^シ巴^ハや^シか^シ駿^{カシ}ヶ^シ所^シ
あしも、墨^クり合^ハ、争^ハひまう者^{シテ}もくじもな^シ、舞^{マツ}の振^ハをし^シくもくじと
ソ古^シ歌^ハの心^シを思^ハひ出^ハき、宴^ハを見^シて、新^ハあん^シを^シ、まけド魂^ハ
の吾妻^ハ、^ハ田舎^ハ、^ハ廻^ハ、^ハ酒^ハ貪^ハり、^ハ飲^ハ、^ハ肴^ハ食^ハて、
果^ハ醉^ハられ^ハ、^ハ宿^ハあひ^ハ、^ハ打合^ハたき合^ハをす、^ハ桜の名^ハふるを^シ、
さざめ^ハむ^シ、^ハと^シ思^ハひ、^ハ三軒^ハ草^ハと^シ、^ハ酒^ハ店^ハふ^シく、^ハ刺^ハ篠^ハ
あく酒^ハす^シ、^ハ赤^ハ生^ハ鶴^ハ猿^ハす^シ、^ハ漢^ハ、^ハ酒^ハを^シく

さうべたきバ戯小狂詩と詠句を咏す、

無酒而何已櫻哉

亦依有櫻携酒未

酢與莧菊雜用酒

春五七日翫化開

在りあきを其顔を和々く狂詩發てり詠句代今す

今日清遊實壯哉

山櫻有意俟君來

酢與莧菊就何事

先於百花樽酒開

風吹せむ柵みもくひ散らく魯魚

かく第ひ粂ドつて成の刻の比やどり小帰ノ如

因古四日晴天朝早く宿を立出く牧未女とも下駄靴の御社ニ訪て、

糸河原村ふとひふ酒店ゆく臺餉のちくいせし小も多々の焼るをき

めで是れも琴坂の名品也かよ一かまを云へりと、吾妻もは戸前と

乃してあよゑゝぬきバ夙未もより小もさきよ松上名は、又上駄靴の御社

ナリ訪て御社ハ公よりはは新シキ小改め造りまきててにあつて、寺と

紫葉も大徳禪寺小訪て、その院の奥の院の複障子張符もとの

名画ぞと見え巡りり帰る比ひみ、仁和寺の法鼓聲跡も同石渠名底俗称美同太、

古生洞コウジントコト

小説より、此の酒樓小舎の内に此木條年より、喘息の病をも
一四五五年より比、故人の醫案より、此藥法を承りけり。
そよが伏臥せり、年々犯病頓よいとひ飲じらひて、此の
報せんとく、此の懸りあは詩一首せぐくあくり。

小子嘗抱旧疴有年于茲百方療之不治矣幸得

先生之神診靈藥而宿病頓瘄如流鳴呼

先生之高德豈可不仰戴哉因賦野詩一章以謝

之

濟世名譽人共傳

杏林方茂洛城邊

幸逢歸死回生術

健飯健行何羨仙

右謹呈

活生洞老先生

此所へ河原の大原次郎の子をそれかへて多くありて是を
ほく日暮くやうりふ帰る

因た五日晴天ひもきの牧家と修小出の某豊後守の跡を訪ひて連れて
禁裡の御典藥を、福井某丹波守
名、萬字、周吉の跡へ訪ひて、其へまし歎
八十二年なりて、またに健ふ宮仕と解して勅使を賞賛ひく、三位を尊せ
す

うき 禁庭を枝はりてあらざるのとゆうへをもむりつるよし世よこの
へあるがゆえどゆゑ我の音せひを聞くあらじの音立て對面せしは
やどて居りれど胸を見く考る所を之ぬきてまより門生小作オシコ^{フエ}_課
家造のための趣あと不そくは凡雅かとつを形へかくるハ事し
奥の生氣、猿樂の能となす舞臺をも有りこれより其度をかくをも
べ、また秘め音を書画、奇しき品をと取歩く見せきり其品をもぞくつ

一龍山蕉客兼山轉池野子画

花卉孔雀

一墨峰傳峯画

山水

一萬其藩画

墨竹

一蔡可陞書

七言詩一章

一張大光書

一行物

一謝時棒畫

陶淵明

一許光祚書

艸字一行物

一龜原林佶書

墨楳

一翁學易書

艸字一行物

一金華田元鳳画

牡丹雀

奇品

一風鳥乾物

一翼

一璫瑁甲

一枚

甲ノ渡リ四許

一ラント天堂亀ナーテルニキルパット甲 戌枚

六甲ノ渡リ三守許

此甲ハ玳瑁色黒アソブ麻の糸の紋アリテ忌ゾグヤ。

座敷の匾額ハ崇蘭館と書く。清の嘉慶それの年、戸部侍郎吳璥の書もあり。二階の上部の匾額ハ有栖川故一品親王の御筆なり。其下間毎北懸物。鳥丸光廣公武者小路実陰に杯の自詠の歌、又ハ唐僧懷素の

書等ある。各古跡なり。病院と珍奈する一间ハ畳八帖。然て襖張替ハ三か大雅堂の山水の画なり。主の翁のあ頃の序よおのきが祖父ハ鷹島司殿下兼熙公乃大政所願證院君小英公の附女願證院君、我藩君公の遠祖。え仕へたり。またす。其妻ハ瀬波高松の君の内を用人職でめ。阿含平齋の女なり。そして我身も其血脉チスジな。私の内人エシマツハ、どうも由縁ユカリ小免シカす。田相誠の名代タケシ。ゆゑにて皆と語りつぶやきも。かく又化行園の子あり。またす。草あり。展觀は是をうけてやうめ。喜か。よの語をし。かとも。小書小文を米菴ミヅクと。人形ヒメイ。金車キンチャ折ハサウて。而

未く、某ニモ书画を取出し見せて、小音もてあへん畫すと
得たり。とぞひき、前ノれ。今三日このゑに、书画、朱墨形、
呂、まき、原と乞ひく見候へまふ、都、よそまほ日のうちり、往々、見景すと
やせしハ、心残り、さくら、船を、ねまと、ゆく、宣納のそくめあざして、まうり東
寺ふ。前ノ日より、真あつひ通し、至り、巴可とて、すゝり、華内ノ今が
西、伏居たゞ、が華内、もとと先大师の千年の御豆野、烹諸堂のそ
まむたと、おがふ、無く、新ふ、あつて、とく、からりト、そまで、まうり見巡りて
のち、山門の外を、ゆふ、左家の、うどの戸の筋穴、むこうを當へるをほらふ。

あるこの松の、氣、妙寺の五重塔の氣を、遂、あふあさやうふうりぬ、誠に怪しきす
あり、所司代の君の、都の内打め、だりて、あきて、はま時、毎、必ず、氣、見渡す事
あると我、是も、真言の不可思議な、むりも、可れ咏一首。

真言の門の、れ石黒、今まふらは、と、そぞぞ、を、まうらふ

所、おとせりて、寺の一扇を、觀智院小仕へ、先づ、頃より、寺門よそて、う乃御
松の口、古ありて、様、すあれば、僧正、は達だ、坊官の人、坐すひく、對面
す、また、寺の、重宝も、はほりて、溢り、小金を、がく、こぼす、珍虫も、ひらう
ひひか、量、一呂、あと見候、とく、真へ通し、先書院の、庫、在、金、八

水戸寧相義公の此寺當時の僧正寺内の古文書を重宝等を以家臣何集
ちてはさへ候ひと有りと僧正の重語せしを一放詰ひ謝候す
ニ即自筆の外よりは所の襖張外の画ハシテ二ツの太刀つゝ小刀紙得
るも、宣平武藏と云ふ絵を一見候。左小雁と松鷺との墨絵也。以今
太刀つゝ小刀紙ハ少々不思議也。斯らをふくして餘物も少く及ばざりし。
は画の上品の武く勇き者也。筆の勢の充満く、やらやそとの併を今迄うじし
タカツの範疇トシナリ。人の業上通ずると云候。名ひ當り侍る。賴は乃尾
風一双。おハ狩野吉法眼の画也。保元平治の間の物を云がく。は餘ある時

軍あらそのをとあナレキ有と云ふよよと。ときのをと名符さうをかふ
事ハ漢も日本も考クタキ事ニテ。餘り小其事とぞくとせむと。かくぬギヒ
カルは定しき。大師唐もくに将来の人物画きたる尾風の字
一双。其のねハ室藏小秘め事と云。唐もくに海をる赤壁の硯古鏡古洞器の
類。古文書。絵画。うち見まき。寺の珍物。先づ年加賀の大守。唐
櫃百合を納め候。主へ持てかど。まご。残きて。鐵也。鐵也。量
とうと語り。信ふ古瓦と数百塊積み。是れを。うとうて惠まき。

やぐく精進の肴種し、羹天スシカツと置あり、盃ハシコともあらむ。事より酒シメハ嘗ては
ゆき、修リツカ小僧を濡すと、もく四種ヨウジり出ヒ。小福コトコト日ヒ、蕃ハタケ、
おぎ家オギヤ、帰シる小夜シナノ入ル。祐館氏赤松氏謙ヒサキひ東ヒタチ、妻子打連ヒツリ、祇園町ヒツツ井筒
ニシテ酒樓ジンロウのびぬ、其家ヒトミ、昔イマシテ鳴神ナガミと、三味線ミナミヅシを秘託ヒツカツし在リ岡カタ
が、未マテと見まくわきゆきハタキ、其座敷シテ小通ヒコトて見ク。其子ヒコうりをひに金カネ
之シテ三味線ミナミヅシハ床シマの上アベうやりく飾ハシケり置ハシケたり、は器ヒコトハシヒコト。細川幽齋君ヒカルモモカニの
女ヒメ、鳥丸光廣トリマルヒカルハ娘ムネ一時ヒツ、江戸エドに住リ。江戸エド、光廣ヒカルにて小愛ナシテ悦ヒキ
経ハタケ、胸ヒツ小玉ヒトコトの事ハタケ、七言シブニ一句ヒコトと書き残リ。又天柱ヒツヅ小鳴神ヒカルと名ハシケ。其の三

哉ハハ、玉の事ハタケと云ハタケ唱歌ウラタツ一章ヒコトを仰ハシケて涙エ。其後シテ有リて、其家ヒトミ移ハシケり傳ヒツカツり
先ヒツカツ志ヒツカツ高タカ近アツシき頃ハタケふるリ。松浦檢校マツラケンキョウと、育法師ヒツツシの、
ば唱歌ウラタツ小節調ヒツヅを下シ。其は名ハタケあらまちヒツカツと、云ハタケ。初ヒツめヒツカツ、歌ヒツヅせハタケり、は器ヒコトハまちヒツカツかぬ
たハタケ、其名ハタケ譜ヒツカツりあリ。其をうちヒツカツ、もすひも今ハタケのまちヒツカツをよシ。件ヒツカツの三味線ミナミヅシ
取ハタケ、玉の事ハタケをよシ。小面白ハタケいにハタケ、尋常ヒツツのさとヒツカツびハタケく。
前ヒツカツを鑑ハタケる能ハタケりタキ、聞人ヒツツの感ハタケてハタケり、當ハタケ入リ居ハタケてハタケられれ。方ヒツカツ
考ハタケふので聞居ハタケりよシ。ひそやかな鳴神ヒカルを、目ハタケ小鳴ハタケきハタケんと見ク

皆人頭のと與まく日夜更ふればさへとくとを爲不帰りぬ

因立ひ日暮もうづ一雨降ふるゝハ牧氏の答應あんぞく相きしむ、モテナシ、
あり妻子川連く事よ出、智恩院の寺内を通りく、裏門へ出、圓山むち

善乃跡の臺子り以て、余り金のと人々、牧氏のうかべかのゆふ河東氏高倉

前中綱吉君の宵や、西池集

俗称主水皆川華

俗称誠菴

画師原在明大和外傳

年子

詣氏杯あり、在明席上やく、絵或ハ唐紙小袋むづく繪をそらが、皆賞
こく筆と揮ひたり、始あくうそて卑言サトコト、サトコト山猫ヤマネコとぞくわう歌妓ウタヒ布安
杯奉カク、無と活ハラハラ、ハラハラ唱ひす、皆川氏詩一首を贈る

東山多藏菴席上奉呈

木村大夫

西園皆川華

側聞四牡駿洛城

何料東山始結盟

此夕須窮謝安興

華筵休引別離情

奉和

皆川先生玉韻

默老木村通明

客路迷春入洛城

今宵何幸與芳盟

先生高意正難謝

謾舉離杯酬厚情

又賀兼はる書博士、皆日さる年ありまくあざり一が故を音
もみてあらん。

書博士賀茂胡休

老矣と衰えをしてもの本の年とあらそひすり私をとぞしれ

五ー

通明

あそくして別てゆきのよしは我身も濡て社乃春雨
三月の酒のと魚もと自小夜すり雨に降りしきれバ
ソヤシとく人を伏うふが一つ、御母やとふゆり也
因む七日、終は雨晴く、元もうら、かよせりつ、これどあそハ故とせんぐま

あひき、何方宿すか、小あつて何乞の年元まろなひ、此松貴とのべ
物の價をあそえ用ぢぬ旅荷を、高麗の船小積く貨見下へ
又相識きる人をふれをのへあひと贈りう。

因む八日、晴天、朝宿と立て、小仮のちりねり、六日七日居かずや一家
至れば、すすげ別を惜ましくせしむ、牧采女、浦訪氏、小原氏などあつて
門送り也、赤松氏ハ大ねまく伴へとく、伊見御道く也、大佛殿の焼跡より、蓮華王院
渋り、道とちふらうて、伊見御道く也、大佛殿の焼跡より、蓮華王院
の三十三間堂小移りで、内陣みても辛祚佛の觀世音をねす、我妻ハ此年比

此御佛を念じまし年ありと、此在京多く焼きたる大々あら御子の像
たる磁器の香爐を納めまきり、矢先の松庵より茶石よりを納まく
り、まくら東福寺へ詣びて、稻荷の門社もあら、此宮の鳥居前より茶
石、諏訪氏侍居く、割烹さへ取ぬ、酒とまくらはまくらを被と
つりちく、昔かく比作見の歌わる、鮎巻某が詩小名く、三五く湯あみ
相食をどして、初夜の社此阿房より取母のうて、夜をかう大也く下す

因十九日晴天、曉までかのうに比、大坂中の時常安橋から、君の門館の
裏の河岸下船ハ若ぬ、五日く船立て、門館頃の山名某俗称半六、其よし

ナタミ天、檜會所と云所を祓やどりと、音より南の方へ出く、東西の門跡
よ詠歌、門前小ハおま記子のまことひお堂の家多く、五月の帝匂の公公
とく、懲怖兜軍の木偶モドキ、並べ連て船で商ふと通じて、心齊橋
筋へ出く、大もう高津乃門社をねま裏の石階を下ふ、下の町は某の黒
焼の茅葺シロガサもあら、家砂利あると、もうて思ふよ江戸ハ廣く大きいせやく、
男をえりてらる人托かざり寄つててあれば、ものお何ともよしと
あすよ、やあたふち黒焼うる家ハ折も野、浪花よのとかは店あらへて
移りかありと見ええきみそりつ、又元の道筋へ歸りて、庄席を門盡稻

江戸カテ黒焼と
のと實方庄内下谷
御成道東側の
中程ニ有但
大坂市奉と同日
二月津記者の
心齊橋

荷の伍社あどよ道シナまみハ戯場シナ砂野ちうくシナハ木偶を搔ツツツツね言ふ
竹本綱多又あと云淨苗理能シナ、喜田辰安舟と云ふ能也シナもと老義經
千本櫻の演劇シナをもそりシナのアハ、手代吉辰光、中村鶴鳴、尾上多
麻シナ毛、中村千人助、岩井扇十郎シナあど云つてとある人シナ、住田川賀シナ仲
言あうと云、石川玉月シナの親せ物在り、人多く立タツてあり、さシナ
をも打通シナりて、日暮晩シナやどり小帰シナ也。

因晦日シナがる降りて、近ふ来り居シナ船シナかへらひき、妻子男女シナの伴シナ
あと、おえく小宿シナと出シナ、四齋シナ擣筋シナと通シナ、道頓橋シナ橋シナりて角シナの芝居シナの俳優シナ

を觀シナ、演劇シナの題目ハ、二島辛勇記シナ、宮本武蔵シナ、徳讐シナの事を仰
設シナる様シナ、俳優シナの人シナ、中村放舟シナ、中村芝翫シナ、中村富十郎シナ、浅尾シナ六
五シナ、皆當筋シナの人物シナある者シナあれバ、威シナは場シナも幸シナなる見シナ
るシナ、金馬シナとゆく、柳シナなあと云見物シナの場シナ遠方シナゆく、今並居シナ折シナハ魚の鱗
志シナくらぶやくシナゆくシナ、二日三日シナすシナあよ入シナいざれバ、密易シナ棧シナを
買シナを得シナくとゆり、階シナうち中の芝居シナあと、苦急傳授シナ、演劇シナふね言
ふシナ、岩井繁若シナと云シナとさ人のあくびにテ、歸シナ眠シナよシナ、一人シナも七隻シナ
船シナ、早朝シナり乃シナか深久松淳名敗シナと云演劇シナ、一所シナ在りづるを人シナ。

行忌仁な清つ、嵐陽寛深尾額十序、松東重を序、寺村欽六、岩井は第卷、行忌
市経、嵐陽先あと、志あきまで初めつまども、角の芝居ふへおときりと、織
事多金を角^{（くすり）}だすり集うて、中の才高を次才ふ淋^{（シラカバ）}と風^{（ハ）}がば、教多くも節ば
し、あめらと聲^{（こゑ）}吹え我、相言観景^{（くわんけい）}と、皆そ苦ちくとぞふ帰る。

四月朔、是天子在すに宣をあく、城通ひとて船^{（ボウ）}よ、安治川^{（アシガワ）}と所を走、
赤松氏と袂^{（えり）}とさりと、ハか船^{（カボウ）}てより近^{（アモリ）}江^{（エチ）}、
とひも、柵五十柵めきたる太船^{（タボウ）}と、旗荷積金紀船^{（キンキボウ）}と御艘^{（メイボウ）}を居す。
此船本素移りて、きてゆて夜と泊^{（ハスル）}。

因二日、是天取^{（アヒテク）}、朝をやく私を牛一川を下る、小川宿のたふ山^{（タマヤマ）}をく、名
至天保山と云ふ、是六年公より仰あつて、山川少埋^{（シラカバ）}き一塵砂^{（チムサ）}を揚て、
山を筑^{（ツク）}ての候^{（トモ）}。今ハ走て小酒樓屋店あど其まへ、多くの戯きの社^{（ナニヤ）}
樂^{（ヨリ）}をむ所とハ成^{（コト）}り、十年だからも跡^{（シテ）}ハ、たゞ波の打音^{（ヒヤクイノリ）}、水禽^{（ミツキン）}の音とす所
あり、新^{（ハニカム）}旅^{（リョウ）}ひ所と云きる、もう唐國人の桑の田のそとび^{（ソトビ）}蒼海^{（アヲウ）}
原^{（ハラ）}と成^{（コト）}りをえど、故^{（コト）}車を思ひ出^{（メモリ）}き仕^{（ス）}事^{（モノ）}、迷^{（マモリ）}の風^{（ハラス）}と吹^{（ハスル）}、
和^{（ハシマリ）}たむをすと、御^{（メイ）}小^{（コト）}臺の比^{（ヒ）}ハ明石の淺^{（アマニ）}水到^{（アマニ）}て、小^{（コト）}城^{（シヨウ）}風光^{（ブカウ）}波^{（ハスル）}を
すと、雨^{（ウカ）}と陣^{（ジン）}をおり、夜^{（ヨリ）}みまくと、余暉^{（ヨリカヒ）}に、併^{（ハシマリ）}をハ、誰^{（タレ）}を語^{（ハスル）}つま。

人丸の社は詣でるものなしりうきハ船もとの年書ものを事へ醫
のくゑへとまきバ船もとより上りし今夜はまくらゆき

因三日雨天うちも雨の晴方ねど風もきのよ船とて吹荒さればえ、船を
出でし室の町又はまろを在初り度く、田舎なりあつごをさぐ人の
たゞねをあらすりに、毎朝とくらり太鼓の音響えり、それで
あは因とくらすりもあし、終日あらざるもあらま、は所ハ梢の魚
多種と呼バツニツ買とりて、煮てそぞぞり、まよひもまよゆき。
因四日雨天、よまたのよは因とく船もと、何すもねそつゞもがくて、医達

ほきねぐとも方もねく、只船の内の人打をりて、お食ひあがりまふ
までやう、風ハまも一吹荒き波立ればくくはまよひ

タゞもまこあよみの後伏あーしはなきアヌ代ねの風のまよひ

今宵もまたお泊り

因五日晴天うちの時をかうより、空晴れ風弱みれば、皆すうは後の因
あまつじひたあまの船の、すねがう檣ホジラの林のとく見ルほくがちを
の音よしお後を坐く、西へりあり、東へりもあり、小帆うけく
まくね、我船を口くまづかく、進むふすをあ帆あげく、所々の漁飯

詠と元和^二、一の因よ三千餘里の海原を走りき。言ひふまろ中
鷗とふ満みどく、船繫りき。

因六日晴天朝早^く舟と此^こへ、宿主は門主から高松の桟川^{さかわ}をぬ
作九年^{きく}の^{三月}歸^{かへ}る。君の仰草^{あおぐ}は全^{ぜん}身をかうす。月の小圓^{ちゆう}せむねく
卑^ひく辛^{から}詠^{よみ}ふ作る數^{すう}と多^{おほ}き。モ向^{むか}は報^{ほう}しきやう、或ハどうもどの
世^よとす^よせー者^{もの}をあだ^{なづ}けり。無^むに新^{しん}きくとがふく、妻子^{さいし}子供^{こど}まで
そし加^{くわ}の障^{さざな}もなく帰^かりたぬる年^{とし}、かと小^こ君の仰惠^{あおぎ}ふと私乃
すりき^ははるよあた^とと^とよかくいやを装^{まつ}へりてひつも筆を

そぞめぬ

大^お加^{くわ}なふ手^てを拂^ぬせぬま^まで^て、^て君^{きみ}ら^らのけのまちあくまき

此書も其友木郷黙光翁高
累天保
六年八月上旬君命より御の高志へ
かちゆれの日記へと歸復の後淨書
さく進手すよむアリ可果を向ひ利害
キセキタリモカム由はゆる事也お行け三日
枝行もとてよめせ

天保五年八月一
其代堂主人

前年四月月初の六日校閲上本武健夫之祐こと



